

UrbanDesignLab.Magazine

都市デザイン研究室マガジン



研究室への置き手紙

Farewell Letters for Our Lab. Members.

2020/03/31
vol.291

特別号
Special issue

— Contents

研究室への置き手紙

「自分が視た"都市"とは、そしてその"都市"にこれからどう関係していきたいか」

写真

「目に焼き付いている風景」

— 修了生、卒業生、宮下さんより

編集後記 — 編集部座談会

修了生からの置き手紙

Farewell Letters for Lab. Members from Master Students.

修士課程を修了し、研究室を離れる6名から、研究室へのメッセージを掲載します。

今回のテーマは、「研究室生活を振り返って および 自分が視た"都市"とは、そしてその"都市"にこれからどう関係していきたいか」。それぞれ「目に焼き付いている風景」の写真とともに、いつもより少し真面目に、したためてもらいました。（MAEYAMA / M2）



小田島 啓太

ODAJIMA Keita

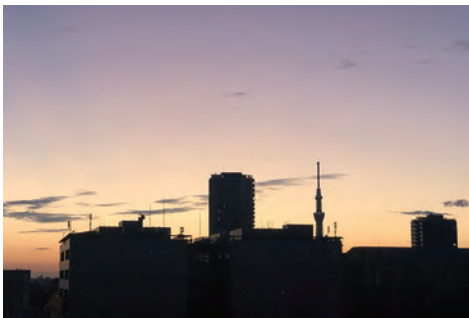
自席からしか拝めない青空の風景の代わりに
(外出自粛で写真撮影かなわず)
10階ベランダからよく見た夜景



この2年間は、様々な視点や経験を得た期間でした。内子PJは、都会育ちの自分が地方の抱える課題とまちづくりの現場を直に体験できる機会に、上野PJは、まちづくりにおける調査からコンセプト作り、仲間集め、実践までの、一連の過程を経験することができました。修士研究では、個人的に興味を持ったことを都市と結びつけ、企業のイノベーション創出という課題に都市がどう貢献できるかについて考える機会になりました。

以下、正直大変恐縮ではありますが、都市と向き合う中で感じたこと、今後のベストな都市への関わり方について簡単に述べておきたいと思います。都市を考える際、「人を中心に考える」ということはよく言われることですが、人の思考や活動を理解し、都市計画に落とし込むのは簡単なことではないなと感じました。都市計画が本当に人の活動に寄り添ったものになるためには、人の活動や文化、歴史についての様々な知識と多様な視点から、起こりうる未来シナリオを想定し、今後の都市の在り方についてのビジョンを示す必要があり、学びの中でこれこそが都市計画のあるべき姿だという結論に至りました。一方で、都市工学という学問がカバーできる範囲に限界があるのも事実です。そこで、それぞれの得意分野を持った企業の人間が、都市で活動する構成員としての自覚を持ち、ボトムアップ的に都市の課題を提起することが必要であり、これこそが都市計画の分野から離れる自分が都市へ関わる一つの方法なのではないかと感じました。これは、企業の一員としてだけでなく、生活者としても同じことが言えます。普段の何気ない生活の中でも、少し意識を持って些細な行動を起こすだけで、自分の住むまちや、コミュニティの在り方は変わってくると思います。まちの構成員として「都市への意識を持った生活者」であることが、自分の思うもう一つの関わり方です。

最後になりますが、とても扱いづらかったであろう自分を根気強く指導してくださった先生方、変わり者の自分を受け入れてくださった研究室の方々、ありがとうございました。今後も宜しくお願い致します。



仙石 宇

SENGOKU Takashi



終電を過ぎても帰宅できるようにと
始めさせてもらった一人暮らしのはずが
結局明け方この景色を眺める日々に

研究室生活を振り返ると、例に漏れず自分も常に何かに追いかけられていたようで、自分の興味・関心を広げられる機会を漏れなく選択できたかどうかは自信がない。しかし東京を出たことがなく東京のほかに胸を張って向き合ったと言える都市がなかった自分の逆東京コンプレックスは、この2年間の経験である程度解消されたように思う。様々な都市で様々な形でまちと関わる機会が存在するという研究室の懐の深さを改めて実感させられた。議論を重ねながらお互いに切磋琢磨できる同期に恵まれたことは、この2年間に非常に豊かなものにしてくれた。楽しかったです。

「自分が視た"都市"とは」というお題をいただいているが、私がこの2年間で視たものはまさに動きだそうとするまちの姿であり、そのなかで尽力する人々の"運動"であった。

地元の様々な流れをひとつの視点から束ねてイベント化した上野、場を作りまちづくりの種を撒いた富士吉田、それぞれ異なる背景のプロジェクトであったが、いずれも進めていく中で地元との関係を一気に縮める場が2年目に訪れた。そしてそのきっかけはいずれも地元のまちを想い活動しようとする人々との出会いであった。特に上野では、ビルオーナーの方々と勉強会を開いていくなかで中心的地元のネットワークが形成され、それらが「アーツ&スナック運動」として結実したわけだが、将来の池之端仲町のまちづくりに向けた実践的な歩みとしての"運動"を0から作り上げる過程に携わることができたことは大変貴重な経験であったと思う。都市計画・都市デザインを学ぶ者として、いかに地元の活動の芽を見つけ出し育てていく手伝いをできるのか、講義で教わってきたまちづくりを現場を通じてようやく少し掴むことができた2年目であった(もうひとつ関わらせていただいた富山については、修論のあとがきで触れているのでそちらをご参照ください)。

今後は都市開発を扱う職に就くこととなるが、ここで掴んだ感覚を忘れずに、都市の中に"運動"を増やしていくお手伝いを続けていきたい。



原 洪太

HARA Kouta

カトマンズの Pati(東屋)
人々の生活、建物の形が見事にマッチし、
都市を楽しむ場として見事に機能している



2年の研究室生活で、町で活動する人と触れ合ったことと人の生活に対する視点を得たことが一番大きかったことに思う。そしてこの2つは絡み合っている。PJでは内子、上野、鵜の浦、カトマンズ、修論では総社（の過去から現在まで）、それ以外にも研究室で杭州、長春、瀋陽、大連などを訪れ、見た。そこで自分が視た"都市"は、個人の生活である。その人々は都市の大きな変化（これは良し悪しの両面、人為的あるいは自然災害の面も含む。）に応答し、生活を適応させ、その結果がまた都市を形作り、あるいは自らの活動で積極的に都市を変化させようと理想を掲げ、活動していた。特に鉄道駅ができてからの総社の町の120年ほどを追った修論で都市の大きな変化がどれほどの影響を与えるかを、そしてあらゆるスケールで人の生活の蓄積が今の風景を作り出していることを実感したし、研究室のおかげで様々なPJの地で町のために強い意志を持って活動し、実際に変えている人と触れ合うことができた。けれど、まだまだこれほどとも考えにできていない。この自分が視た"都市"（の将来や、捉え方そのもの）と、形としてある都市とをいかに結び付けるかも。そして個人の生活そのものが都市に集積するものである以上必要な、群として捉える方法も。

しかし、せっかく研究室には「生活」が視野にあり、それを自らの代から現れたこと（これまでの研究室の視点は大きく捉えれば形の方であった。）を指摘する同期もいたにも関わらず、考えを深めるための議論をしていなかった。2年を走り通したとは思わないが、同じ都市を共に見る同期がいる貴重な時間の中で立ち止まって考えを深めるべきであったと、改めて振り返ると後悔してしまう。

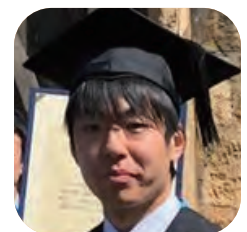
話を戻して自分が視た"都市"に関わる方法。自分は少なくともしばらくは都市の形を作る側となる。そこで個人の生活の視点を持ち続け、結び付く形を実現すること、その際に群の意識を忘れないこと。個人の生活の視点を持った人間が形を作る側にいることに価値が出るように都市に関わりたい。



沼の上、船から見た手賀沼フィッシングセンター
いつも決まった場所から見てはいけないうのだな
と痛感

藤原 大樹

FUJIWARA Daiki



この修士2年間で得たかったものは、自分自身を都市でも、緑地でも、その他でも、その道の人間として胸を張るに足るほどの経験値であった。そのために、あれもこれもと手を出してみても、もがきながらなんとか走り抜けた2年間だった。50年の歴史を、まちを歩き、新聞や図書に目を走らせ調べた高島平。短期、長期的に人が過ごしたくなる空間とは何かを考え、自ら手を動かした手賀沼。観光客と地域住民、開山期と閉山期、両者が共存できる都市像を模索した富士吉田。

これらの3都市について視ても、気候、地形、歴史、文化、産業、生活はまさに三者三様であるが、いずれの都市も、ほとんど変えることのできない自然の層の上に、その都市の成立する以前の時代の層、成立以後の各時代の層が重なり合っていてということがいえる。それぞれの時代の層にはそれぞれの時代の人の意思が反映されており、そのあとの時代の人が残したり、その上に新たな層を重ねたり。現在見えている風景はそれらの層の重なり合いが描くモザイク画であって、それも数日、数年の間に変わってしまう。考えれば当たり前のことではあるが、都市とは自然の制約の中でそれぞれの時代の人がそれぞれの意思のもとに作り出していったものの積み重ねであるということを感じた。

もう目の前に、社会人生活という新しい冒険の道が開かれようとしているが、都市に対してどのように関わることができるのであろうか。都市がこれまでの時代の積み重ねであるとすれば、これまでの時代の層からそれぞれの時代の人の意思を読み取り、尊重しつつも、新たな層を重ねる人間として責任を持って行動していきたい。この2年間、いろいろな活動ができたが、あくまで学生という地位あつてのものであった。仕事として都市に働きかけ、維持、更新することはできても、個人としてできることは減ってしまうかもしれない。せめて、自分の暮らしているまちでは新たな層を重ねられるように、この2年間続けてきたように歩き、読み、考え、手を動かしたい。



前山 倫子

MAEYAMA Rinko

故郷富山の山並みと町
立山を見るとなんとなく安心するのが
不思議だなと思っています



修士2年の途中、自分のやりたいこと、やるべきこと、できること、そういったもののバランスが取れず、少しずつのズレがだんだん大きくなって動けなくなるような時期がありました。思い返してみると、私はそれまでほとんど自分の進路や将来について悩んだことがありませんでした。とても幸運なことに、私は当然のように自分の行きたい道に進み、周囲もそれを認めてくれました。そんなことが続いていこう、と思えなくなったのが、立ち止まってしまった大きなきっかけの一つだと思います。修士1年では目の前のことをなんとかしようと、何でもできるようになろうと頑張り、2年になって自分がどうしてもできないことが見えてきたり、思うように頑張れなかったり、漠然と思い描いていた理想のすがたと実際の自分が着々と離れていく感じがしました。私は学生生活の終わりになってようやく、自分が特別な力をもたない小さな人間のひとりだと、本当に気づきました。

都市はそこにたくさんの小さな人々の営みが集まってできていて、特別なものでなくても、私はそれが現れている風景が好きです。「小さな自分」に気づいたことはショックではあったけど、前よりも自然に、私も何気ない風景をつくる人々のひとりなんだと思えるようになりました。私は都市からささいな魅力を見つけることには少し自信があって、私がそういうふう都市の風景から魅力を感じることは、そこに生きている人々を尊ぶことに、そしてその中の小さな自分自身を大事に思うことに続いているのかなと思います。卒業設計と修士研究でどちらも「名前のない風景」を扱っていたことも、気づかないうちに繋がっていたんだなと思いました。

私にとって都市は、小さな人々の生活も、大きな社会の動きも、ずっと昔の出来事も、自然も、気候も、全部をため込んで、いつも私たちのまわりにいて、私たちと世界を繋げてくれるもので、そういうところが大好きです。都市のために何ができるのか、大きな夢を語ることは今はできないけど、まずはその中のひとりとして生活するところから考えていきたいです。



高島平のありふれたスーパーマーケットも
その来歴を知ると面白く見える

箭川 展

YAGAWA Hiromu



「ここにはハムレットが住んでいたのだと考えただけで、たちまち、この城がそれまでとは変わって見えてくるのはおかしいことだと思いませんか。」

トッアンは、物理学者ボーアの言葉を引用する。同じ空間にいても、私が視る"都市"とあなたが視る"都市"は同じではない。

明るく適度に振る舞うというコミュニケーションに甘えてしまいがちな私は、そうしているために気付かれないこともあるが、都市を愛する人々の中で都市の見方が貧弱であることにコンプレックスを抱えていた。卒業設計や修士論文では、こうした自分という存在を正当化するかのように、都市に興味を持っていないとされている単身生活者について扱った。修士論文では、単身生活者の都市の捉え方を踏まえて都市は如何にあるべきか、拙くも示すことができたのではないかなと思う。

思えば都市デザイン研究室での活動も、「都市」をデザインすることよりも、「都市の見方」をデザインすることが多かった。国会図書館や現地でのリサーチをベースに、まちの成り立ちについての展示やまちあるきを行った高島平プロジェクト。富士吉田プロジェクトでは旧郵便局リノベーションという空間作りにも携わったが、将来の拡張をどのように捉えるか、まちについてどうすれば興味を持ってもらえるか、という問題意識が出発点であった。唯一無二であるこれらプロジェクトでの経験、そしてコンプレックスから逃げずに2年間目の前のことに向き合ったこと。これらによって自分の貧弱だった都市を視る目も少しは豊かになったのではないかなと思えることが、研究室生活における一番の財産だ。都市デザイン研究室でなければここまで歩めなかったと感じる。研究室の皆様には心から感謝している。

大きなビジネスの世界では、都市はほぼ投資対象としての良し悪しという観点からのみ見られているのではないだろうか。都市の多様性 / 面白さ / 可能性を引き出し使いこなせるように、ビジネスの世界の見方を変えていくという役割を果たせるのではないかと考えている。この信念を胸に、社会でも明るく歩んでいきたい。

卒業生からの置き手紙

Farewell Letters for Lab. Members from Bachelor Students.

今年は卒業関連のイベントが中止、追いコンも延期という状況でした。その中でも学生の言葉をできるだけ聴きたいと考え、大学を卒業、就職し研究室を離れる4名の学生からも「都市工 / 研究室生活を通して自分が視た " 都市 " とは、そして " 都市 " にこれからどう関係していきたいか」というテーマの置き手紙と、「目に焼き付いている風景」を寄稿していただきました。社会へ出る学生の「これから」を感じるメッセージです。（MAEYAMA / M2）



川西 絢子
KAWANISHI Ayako

昔から私はメディアに興味があった。
大学入学後もその希望は増したが、これを学べる正式な学科は存在せず、私は進振りで大悩みすることになった。
紆余曲折を経て都市工学科を選んだ時、私はカリキュラムも何も知らなかった。部活が忙しかった。設計が苦手だった。授業が難しかった。こんな理由を並べて逃げたってよかった。
それでも私が踏ん張れたのは、学科同期の面白さと懐の深さがあったからだ。私の選択を拒絶することなく受け入れてくれ、面白い話をしてくれる彼らの存在なしには、私はここにいなかった。
私にとっての都市は人の集合体。性別、年代、境遇。全ての境界を超えて受け入れる場所。メディアを学びたかった私にとって、この学問は必要な土壌だった。これからも私は“都市”のように全てを受け入れつつしなやかに生きていきたい。



この3年間お世話になったカオスな演習室
私にとって大事な大学の居場所。ありがとうございました



小林 拓人
KOBAYASHI Takuto

都市とは、それ単体で無機的に一括りに語れるものではなく、そこに存在する人や自然、文化などの様々な構成要素が不可欠であることを深く知り、これらの要素によって都市が決定されるという関係に気づいた。卒業論文では、これらの要素が都市を決定付けることに対して、これらの更新周期つまり入れ替わりの時間が、構成要素ごとにどのように異なるかと言う内容を研究した。この視点は都市についての前述の考察を深めるとともに、今後において「都市」と向き合う仕事などをした際や、旅行出張などで様々な「都市」と触れ合う際に、ここで学んだことを応用していきたいと考えている。



卒業研究で何度も訪れるとともに、変わりゆく景色の中でも変わらない根本を感じるこの下北沢の写真です



野上 正行
NOGAMI Masayuki

「都市とは…である」と言い切るほどの確信を得られたわけではありませんが、ひとつ確実なことがあるとすれば、それはこの2年半、毎日のように演習室に残って都市に熱中できたということです。そこまで私を衝き動かしたのは、都市の背後に見え隠れする「人間」なのだと思います。それは、生活する人間であり、空間をつくる人間であり、空間を改変する人間です。
この春からは都市に携わる仕事に就きますが、この点では都市へのかかわり方が大きく変わるとは思っていません。むしろ、ひとりの生活者として、そして今度は「空間をつくり、改変する人間」として、都市への尽きぬ興味に衝き動かされたいと思っています。

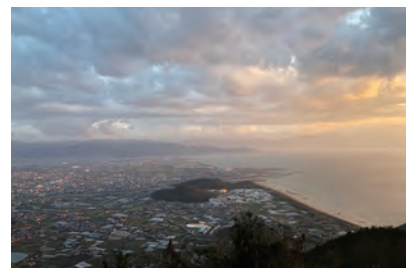


卒業設計対象地の老朽郊外団地付近の住宅誘致碑。団地に住む老親子に話を聞いた後で発見し、立ち尽くした



廣瀬 真衣
HIROSE Mai

都市工生活を通して痛感したのは、正直に言うと、都市というのは複雑すぎて自分の思考がなかなか追いつかないものだということです。例えば目的ひとつとっても、ビジネスの目的は何かと聞かれたらつまるところ利益追求ですと即答できるのに対し、何のために都市計画を行うのかと問われるとシンプルには答えにくいと感じます。また、これに関連して印象に残っているのは、都市計画史の講義で中島先生が「都市計画家とは何なのだろうか」と問われていたことです。都市計画の結果を被るのは人々の暮らしであるということを念頭に置きつつ、計画に関わる様々な主体の利害調整を行うというのは、非常に高度な思考を要すると強く感じます。就職後は都市に直接関わる機会はなくなってしまうかもしれませんが、自分なりに都市に対して関心を持ち続けようと思います。



香川県の稲積山の頂上にある高屋神社で見た日の入がここ最近の印象深い風景です

宮下さんからの置き手紙

Farewell Letters from Dr. Miyashita.

2015年の秋から都市デザイン研究室に在籍し、昨年度博士課程を修了、2019年度は特任研究員として引き続き研究室にいらっしゃった宮下さん。4月からは武蔵野大学建築デザイン学科助教の職に就かれるということで、「研究室への置き手紙」としてメッセージを頂きました。

宮下さんには2019年2月号にて博士研究についてインタビューさせていただいたことが印象に残っています。新たな場所でも益々のご活躍をお祈りしています。

(MAEYAMA/ M2)



宮下 貴裕

MIYASHITA Takahiro

4月に武蔵野大学建築デザイン学科へと助教として着任するにあたり、研究室を離れることとなりました。この文章を書くのは2年連続となりますが、この1年の間にもとても貴重な経験をさせていただきました。予期せぬタイミングで富山に関わることとなり、本を執筆する機会もいただきました。初めて足を踏み入れるフィールドで一から都市の歴史を学び、現地の図書館で文書を発掘する時間はとても有意義なものでした。都市デザインやまちづくりといった分野では常に普遍的な解答があるわけではなく、それぞれの場所で見出される個別解を積み重ねていく経験が大切なのだと、この一年富山プロジェクトに参加する中で改めて気づかされました。皆さんにも、一つ一つのフィールドとの出会いを大切に、日々学んでほしいと思います。

最後になりましたが、5年間お世話になった先生方、そして都市デザイン研という場に心から感謝します。ありがとうございました！



初めて訪れた天理市。予想ができない環境に足を踏み入れたときの言葉にならない体験がまだ国内でできるのだと嬉しくなるとともに、まだまだ知らないことばかりだと気づかされました

編集後記—編集部座談会

The Editorial Postscript - Editors Roundtable Discussion

都市デザイン研究室マガジンの編集を担当した2年間。発信することとは、研究室でマガジンを出す意味とは。修了式（なくなってしまったが）の日に、この2年を振り返り、最後に4人で語り合った。（HARA / M2）



▲山口は外出自粛期間のため、ビデオ通話で座談会2年間通い詰めた研究室も、もう現役として集まるのは最後。

2018年度と2019年度

前山：2018年度は形式が基本A4の表裏1枚の2ページでしたね。

原：2019年度から最低4ページにしようと言った結果、毎号8ページくらいに…。

山口：みんな書きがちだからね。

藤原：今はむしろA4の1枚にまとめる方が難しいかも。文章を推敲しないといけなから。



1人1人を振り返る。

前山：山口さんは文字が多いよね。でも研究室旅行号は絵が来たからびっくりした。絵が上手だし。研究室旅行でのご飯の話が多いね（笑）。

山口：あれははっちゃけたね。

前山：原君はレイアウトが段々上手になっていったよね。長春のとか読みやすかった印象。

山口：研究室旅行の長春のやつは気合入ってたね。

前山：あと研究室の歴史か。毎回ボリューム多いね。それと旅行、歴史、本と好みが出ていいよね。

前山：藤原君はPJ棚、手賀沼、PJまとめ、佐原、庭園だね。

山口：自分で企画して書くのが多いね。

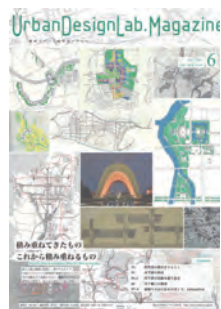
藤原：企画的に面白いと思うのは最初にやったPJ



No.269 サマースクール号

編集：山口

2018年の中国・杭州でのサマースクール。異国でこそ見えた歴史、保全とは。



No.280 研究室の歴史号

編集：原

丹下研時代の計画策定等を渡邊定夫先生に伺いながら。我々はそこに何か積み重ねられたか。



No.267 PJの棚号

編集：藤原

研究室にある資料を置く棚はプロジェクトごとにその性格を表していた。



No.281 座談会号

編集：前山

各研究室から1人ずつの座談会。都市工で学び、今後都市に共に関わる仲間の言葉・議論。

の棚を見て、PJの性格を分析したもの。高山文庫と「棚」で一応関係してて、表裏で一貫してる。前山：裏面のスペースが少ない中で直前で直したり。どれも1ページにまとめるのすごいよ。

原：自分だったらどんどんページ数増やしちゃう。前山：2018年度のそれはまとめる訓練だったのか。原：前山は最初の復デザの号から、紙面のデザインこうやると読みやすいんだって。

藤原：余白の取り方とかね。

原：毎回、紙面デザインの学びを得たな。それにやることにメッセージ性が強いのも良かった。同期の座談会とか、マガジンでいうかもはや都市工の中でやる意味があるものがあったと思う。

思い入れのある号

山口：サマースクールの号が、上の写真の切り取りも含めて気に入っている。

前山：びっくりした。突然あれになって。これは智佳ちゃんの一人称の文章で良かったよね。

山口：ほかの人の成果とかを入れてなかったからね。詳しいサマースクールの内容も入れてないし。だったら一人称視点でまとめようかなと思って。

原：号としては研究室の歴史が思い入れがあるかな。何回もインタビュー行っだし、結構調べたし。

前山：これは一次資料にあたってのがかいよね。

原：色んな図書館行ってね。あと文章だと長春の研究室旅行の1ページ目の文章が思い入れがあるかな。

藤原：僕は棚の号ですね。M1で3番目だけど、初めてオリジナリティを問われる回だったので、結構考えて、さらにその時但馬さんも悩んでて、2人で色々喋って決めたから思い入れがある。企画内容も良かったと思うので、全体的に良かったかなと。前山：あれはもっと評価されていい号だね。

前山：私はまあ全部(笑)。全部だけど、座談会の号と去年の研究特集号かもしれない。特に座談会は自分でこういうのやりたいと思ってやったし、インタビューの方は先生に聞くのは要るだろうというので。両方インタビューとして工夫するけど、喋ってくれたことをどう伝えるかというところを頑張ったので思い入れがありますね。

原：実は他人にすごい興味がある？(笑) この人だと思って話を聞いておきたいの？それとも世間一般にどういう人でも聞いておきたいの？

前山：この人だ！と思うし、両方。研究では、宮下さんの話は聞いておきたいと思ったし、座談会も自分でこの人の話を聞きたいと思って選んでいるし。

後輩について・期待

前山：**應武さん**は最初の記事はデザ研の話を書くものだね。あと旅行と常盤平だから、個人の色が強い感じだね。

原：いい意味で主張が強めだからね。

前山：あんま迷ってるの見たことないもんね。應武さんは研究室全体を見て、マガジンがどうあるべきか・研究室がどうあるべきかの視点があるのがすごい。

前山：**西野君**は多分元々こういうのやってなかったのに、如実に上手になってくからすごいなあと。

藤原：ただもう少し個人的な趣味を見たかったね。山口：じゃあ来年度に西野が好きなものを題材とすることを期待しますか。

前山：確かにね。担当した号の内容見ても何が好きかわからないからね。

原：**宗野**はデザインうまい。雨の日のとかきれいな。前山：読みやすいよね。そのかわり本人はタイトルつけるのが下手だって言ってるけど。

原：建築学会のとかめっちゃ恥ずかしがってるよね。前山：記事としては北沢先生のもちゃんとまとまってて。解釈がうまいのかな？

原：会に行っていないけど、内容つかめるくらいに。前山：そんな宗野さんには何を期待しますか？

原：一緒にインタビューしたから、研究室の歴史を扱うことを期待というかお願いしたいね(笑)。

マガジンの広報

原：読者から意見もらうとか、ちゃんと発信するとかができなかったな。どうすればいいのか。

前山：Google Formも回答が来なかった。読んでくれる人はいると思うんだけど、どこに届いていて、どこに届いていないのか。

原：たまに他の研究室に持って行ってたけど、本当はラック作るべきだった。他の専攻の人にも読んでもらいたいよね。

前山：マガジンは外向きなのか、内向きなのかという問題がある。本来は研究室内のPJとかの情報共有だったけど、最近は外向きの記事が多くなって。今年はPJ扱ってないんですよ。

原：確かにPJはWebマガばかりになってる。

山口：Webマガの広報も今後の課題かな。

前山：宗野さんと喋ってたけど、Twitterで逐一更新するべきですねって。リアルタイムで何やってる

か見えるから。

山口：何も広報してないの本当にまずいね。研究室のトップページにも出ないし、見られない。

マガジンの今後

原：マガジンの編集が最適なタイミングかはわからないけど、デザ研でやってることとかの共有も兼ねて、自分が今何をやっていて、どう考えていてというのを話しあって、考えの共有をするべきだったかなと思う。M1の時からもっと話し合うべきだったなと。

前山：話し合う場がね…。

原：抜けるタイミングになると、もっと議論しておくべきだったなあと。

前山：マガジン編集部をサロンとして運営(笑)。

藤原：そういうのを定期的にコーナーでやるとか。今年度も最初は書評をやろうとか言ってたけど…。1年通してコーナーがあるとね。

前山：確かに1年通して一貫したものがあるマガジン見てみたいよね。



▲ビデオ通話で編集部集合写真

✖ 編集長の編集後記

これを書いている今現在、新型コロナウイルスの影響が世界中、様々なところで起きている。修了した私たちも、大学の皆さんも日々変わる状況への対応でかなり落ち着かない感じだ。卒業ムードなんて浸っている間もないが、せめてこの置き手紙号はいつも通り、最後だから…と言ってちょっと真面目なことを話す場所として刊行したい。どのメッセージも各人の学生生活が想像できて面白く、編集が楽しかったです。今号に限らず、これまで取材に協力してくださった皆さま、本当にありがとうございました。これからこの都市デザイン研マガジンが、メディアとしての誰かのためになりながら続いていきますように。(M2 前山)



URBANDESIGN
LABORATORY